実存主義者のカフェにて

――自由と存在とアプリコットカクテルを

ジャン＝ポール・サルトル
シモーヌ・ド・ボーヴォワール
アルベール・カミュ
マルティン・ハイデッガー
エトムント・フッサール
カール・ヤスパース
モーリス・メルロ＝ポンティらとともに

Sarah Bakewell

AT THE EXISTENTIALIST CAFÉ

Freedom, Being and Apricot Cocktails

Copyright © Sarah Bakewell 2016
Japanese translation rights arranged with
Sarah Bakewell c/o Rogers, Coleridge and White Ltd., London
through Tuttle-Mori Agency, Inc., Tokyo

ジェーンとレイに

目次

第1章　ねえあなた、実存主義ってなんておぞましいのかしら！　007
第2章　事象そのものへ　054
第3章　メスキルヒの魔法使い　075
第4章　世人（ひと）、良心の呼び声　109
第5章　ニワザクラを噛み砕く　144
第6章　自分の原稿を食べるなんてまっぴらだ　179
第7章　占領と解放　200
第8章　荒廃　254
第9章　人生の研究　301
第10章　ダンスをする哲学者　328

第11章 かくも深き対立 347
第12章 もっとも恵まれない者の目で 387
第13章 あのすばらしき現象学 426
第14章 いわく言いがたい輝き 453
登場人物紹介 469
謝辞 481
訳者あとがき 485
原註 554
おもな参考文献 572
図版クレジット 573
索引 585

凡例

・（1）（2）……は著者による註で、章ごとに番号を付し、「原註」として巻末にまとめた。

・割注と「原註」の［　］は、訳者による註をあらわす。

・本文中の書名は、邦訳があるものは邦題を表記した。未邦訳の書籍については、初出のみ原題の逐語訳の下に（　）で原題を加えた。

・引用は、邦訳のあるものは参考にしたが、基本的に著者が引用している英文から訳出している。

第1章

ねえあなた、実存主義ってなんておぞましいのかしら！

三人がアプリコットカクテルを飲みながら実存主義を語り合い、
人々は夜ふけまで自由について議論し、多くの人たちの人生が変わっていく。
さて、実存主義とはいったいなんなのだろう。

「実存主義は哲学というよりは気分のようなものだ」という言葉をときおり耳にする。実存主義をさかのぼれば、一九世紀には苦悩する小説家たちがいて、もっとさかのぼれば、無限の空間の沈黙におののいたブレーズ・パスカルや、さらに古くは内省の人、聖アウグスティヌス、もっと古くは、人生のむなしさを嘆く旧約聖書の「伝道の書」[1]や、神が仕掛けてくるゲームに疑問を感じながら結局は服従してしまうヨブへと行き着く。要するに、なにかに不機嫌になり、反抗し、うんざりしたおぼえのある人ならだれにでもあてはまるということだ。

それはさておき、現代の実存主義の誕生をある時期に限定するなら、それは一九三二年から三三年にかけて、三人の若き哲学者がパリのモンパルナス通りにある〈ベック・ド・ガーズ〉[2]で看板メニューのアプリコットカクテルを飲みながら語り合っていたころである。

そのときのことをのちに詳しく語っているのがシモーヌ・ド・ボーヴォワールで、当時二五歳く

らいだった彼女は、エレガントに細めた目で世界を丹念に観察していた。一緒にいるボーイフレンドは二七歳のジャン＝ポール・サルトルだ。猫背、熱帯の魚みたいに突き出した唇、肌理（きめ）の粗い顔、大きな耳。両目が別のほうを向くのは、ほとんど見えていない右目が、ひどい外斜視のせいで外へ流れたり焦点が合わなかったりするせいだ。どこを見ているのかわからないので、話しかけるほうは戸惑うだろうが、左目にだけ焦点を合わせていれば、その知的で温かい視線がこちらに向けられているのがわかるはずだ。その目は、どんな話にでも興味を持つ人の目である。

今、このカフェでサルトルとボーヴォワールが身を乗り出して話を聞いているのは、同じテーブルにいるもうひとりの人物が目新しい話題を提供してくれるからだ。その人物とは、サルトルの古くからの学友で、同じエコール・ノルマル・シュペリウール（パリ高等師範学校）の卒業生であるレイモン・アロン。ふたりと同じように、アロンがパリにいるのも冬の休暇中だからだ。違うのは、サルトルとボーヴォワールがフランスの地方都市で教鞭を執っていて――サルトルはル・アーヴルで、ボーヴォワールはルーアンで――アロンはベルリンで勉強していること。アロンは、ベルリンで勉強中の「現象学（フェノメノロジー）」というもってまわった名前の哲学について、友人ふたりに語っているところだ。フランス語でも英語でも、なんとも長ったらしく、それでいて優雅な響きのあるこの単語は、それだけで弱強三歩格（弱い音、強い音を交互に三回繰り返して一行を作る）の詩の一行になりそうなほどである。

もしかしたら、アロンが話したのはこんな内容かもしれない。これまでの哲学者は抽象的な原理や理論から始めることが多かったが、ドイツの現象学者たちは、みずから経験する人生の一瞬一瞬へと直接入っていく。彼らはプラトン以来、哲学の問題とされてきた、「事物が実在するかどうか」

シモーヌ・ド・ボーヴォワールとジャン＝ポール・サルトル

や、「その実在をどうやって確かめるのか」など、ほぼすべての問題を脇に置くのだ。現象学者に言わせれば、そうした疑問を口にする哲学者といえども、すでに事物、少なくとも事物のように見えるもの、あるいは〝現象（フェノメナ）（ギリシャ語で、「あらわれているもの」という意味）〟に満ちた世界に投げ込まれているではないか。それならば、現象との遭遇に意識を集中させ、ほかのことは無視したらどうだろう。これまでの問題を永遠に捨ててしまう必要はないが、それらをいわば括弧（かっこ）に入れて、哲学者がもっと現実的な問題と向き合えるようにするのだ。

現象学者の先駆けともいえるエトムント・フッサールのスローガンは「事象そのものへ！」[3]。その意味は、事物をめぐる解釈に時間を浪費するな、とりわけ、事物が実在するかどうか考えて時間を無駄にするなというこ

とだ。そして、これがなんであれ、わたしに見えているこれをありのままに観察し、できるかぎり正確に記述せよ、ということである。もうひとりの現象学者マルティン・ハイデッガーは、そこに別の解釈を加えた。歴史上のあらゆる哲学者たちは、二次的な問題に時間を浪費し、もっとも重要な問題、つまり〝存在〟について問うことを置き去りにしてきたというのだ。事物があるとはどういうことか。わたしがいるとはどういう意味なのか。それを問わないかぎり、どこにもたどりつかないとハイデッガーは主張する。そして、それを問うには現象学的な方法がふさわしいという。つまり、頭でっかちなやりかたではなく事物に注意を向け、そのありのままの姿を捉えるのだ。

「いいかい、わがいとしの友よ（モン・プティ・カマラード）」。アロンは学生時代からの呼びかたでサルトルに話しかけた。「もしきみが現象学者だったら、このカクテルを語ってそれを哲学にすることができるんだ！」

その言葉を聞いてサルトルが青ざめた、とボーヴォワールは書いている。強い印象を与えるために、それまで現象学に関してはまったく耳にしたことがなかったような書きかたをしているが、実際はふたりともハイデッガーを少し齧（かじ）ってはいた。一九三一年、ハイデッガーの講演「形而上学とは何か」の翻訳が「ビフュール」誌（一九二九年から三一年にかけて発行された）に掲載され、同じ号にサルトルの初期の評論も掲載されていたからだ。ところがボーヴォワールによれば、「ふたりともまったく理解できないために、そのおもしろさがわからなかった」[4]という。しかし、今やっとそのおもしろさがわかった。現象学とは、哲学をごくふつうの生（なま）の経験に結びつける方法なのだ。

三人はこの新たな幕開けにわくわくしていた。それまで、高校でも大学でも、サルトルとボーヴォワールとアロンはフランスの厳格な哲学の授業を受けてきた。知識とはなにかを問い、イマニュ

エル・カントの著作を解釈し直すのが授業の大半だった。認識論の問題は、さながら万華鏡を回すように次から次へと湧き出て、つねに同じ場所へと戻ってしまう。わたしはなにかを知っていると思っているが、そのなにかを知っていることをどうやって知るのか。これは骨の折れる、それでいて無益な問いであり、三人とも試験の成績は優秀だったが、認識論には満足せず、なかでもサルトルがもっとも不満を感じていた。卒業後、サルトルは新しい「破壊的哲学」[5]の構想をほのめかしていたものの、それがどんな形になるかは明言しなかった。自分でもはっきりわからなかったからだ。既存のものへの反抗心だけでは、なかなか形にはならない。それが今、自分より先にだれかが達成してしまったらしいとわかったのだ。現象学を語るアロンの言葉にサルトルが青ざめたとすれば、おそらくそれは興奮と同時に苛立ちのせいでもあっただろう。

いずれにせよ、彼はこのときのことをずっと忘れず、四〇年以上あとのインタビューでも触れている。「あれには衝撃を受けたよ」[6]。ようやくほんものの哲学にめぐり合ったのだ。ボーヴォワールによれば、サルトルは近くの書店に走っていき、実際にこう言ったという。「現象学に関する本を今すぐ全部くれ！」。店員が出してきたのは、フッサールの教え子だったエマニュエル・レヴィナスの『フッサール現象学の直観理論』という薄い本だ。ページがカットされていなかったため、サルトルはペーパーナイフを使うのももどかしく、レヴィナスの本を手で破いて、通りを歩きながら読みはじめた。もしかしたらこのときのサルトルは、ジョン・キーツがチャップマン訳のホメロスに出会ったときと同じ心情だったかもしれない。

そのときわたしは星空を観察する人が
視界に新しい惑星を見つけたような気分だった
あるいは屈強なコルテスが鷲のごとき目で
太平洋を見渡したときの気分だった
部下たちが感嘆し顔を見合わせるなか
黙ってダリエンの頂上に立っていたときの[7]

サルトルは鷲のごとき目にはならなかったし、黙っていることもできなかったが、おおいに感嘆していたのはたしかだ。その熱狂ぶりを目にしたアロンは、秋にベルリンへ来て、自分と同じフランス学院で学んではどうかと提案した。そうすれば、ドイツ語を勉強して現象学者たちの著作を原書で読めるし、彼らの哲学の熱を間近で直接吸収できるから、と。

ナチスが勢いを増しつつあった一九三三年は、ドイツへ行くのに最適な時期とはいえなかったものの、サルトルにとっては人生の方向転換にもってこいのときだった。というのも、学校で教えることに飽き、大学で学んだ学問にも飽き、子どものころからの夢だった偉大な著述家になれていないことにも不満を抱いていたからだ。小説であれ評論であれ、書きたいものを書くためには、まず〝冒険〟をしなければならないのはわかっていた。これまで、コンスタンティノープル（現イスタンブール）で港湾労働者とともに汗を流すことを夢想し、ギリシャ・アトス山の修道士たちとの瞑想を思い描き、あるいはインドで不可触民（パリア）と路上をうろついたり、ニューファンドランド島の沖合で漁師と嵐に立

ち向かったりする生活に憧れたこともある。[8] しかし今は、ル・アーヴルでの教員生活をやめるだけでも、じゅうぶんな冒険だった。

サルトルは留学の手配をし、夏が終わるころベルリンへ出発した。やがて、一年の講座を修了してパリに戻ってきたときには、うまい具合にブレンドされた思想ができあがっていた。ドイツ現象学の手法には、それより前のデンマーク人哲学者セーレン・キェルケゴールなどの思想が混じっているが、サルトルはそこに、自分自身のフランス人らしい文学的感性を付け加えたのだ。現象学を、その創始者たちよりさらに個人的なわくわくするやりかたで人々の生活に結びつけることにより、サルトルはある思想の生みの親となった。その思想はパリの趣を保ったまま、世界じゅうに衝撃をもって迎えられることになる。それこそが現代の実存主義だ。

サルトルの発想が卓越していたのは、現象学をアプリコットカクテルの哲学に、そしてそれを給仕するウェイターの哲学に変えたところにある。彼の手にかかれば、どんなものでも哲学になった。期待、倦怠、不安、興奮、山登り、求め合う恋人たちの欲望、嫌われ者の憎しみ、パリの公園、ル・アーヴルの冷たい秋の海、パンパンに膨らんだクッションの座り心地、女性が仰向けに寝たときの胸の谷間、ボクシングの試合の高揚感、映画、ジャズソング、街灯の下で見知らぬ者同士が交わす視線。サルトルは、めまいやのぞき見、恥辱、サディズム、革命、音楽、セックスから哲学を生み出したのだ。ことにセックスから。

サルトル以前の哲学者は、論理や主張を丹念に記述していくスタイルだったが、サルトルの場合

は小説家のような書きかたをした。実際に小説家だったのだから驚くにあたらないが。小説や短編集や戯曲でも、そして哲学書でも、彼は身体的感覚や社会体制や人間の気分といったものを描いた。なかでも最大の主題が、自由とはなにかということだ。

サルトルにとって自由とは、人間のあらゆる経験の中心に位置するものであり、人間をほかの物体すべてから切り離すものである。物体はただそこに置かれて、押したり引いたりされるのを待っているだけだ。人間以外の動物は、おおむね本能に従って行動し、その種に特徴的なふるまいをする。ところが、人間であるわたしの場合、あらかじめ決められた性質というものはまったくない。行動をみずから選びとることで性質を形づくっていくのだ。もちろん、生まれ持った生物としての特質や育った環境や文化に影響を受けはするだろうが、そのどれもわたしを形づくる完全な青写真にはなりえない。わたしはつねに自分自身の一歩先にいて、先へ進むごとに自分を作り出している。

サルトルはこの原理をひとことで言いあらわし、実存主義を定義してみせた。「実存は本質に先立つ[9]」。この言葉は、簡潔ではあるが理解はしにくい。しかし、おおまかに言えばこういう意味だ。気がついたときにはこの世界に投げ込まれていたわたしは、自分自身の定義（あるいは性質や本質）を創造しながら進んでいく。それはほかの物体や生物には起こりえないことである。なんらかのラベルをつければわたしを定義づけられると思うかもしれないが、それは間違っている。なぜなら、わたしはつねに変化している作品だから。行為によってたえず自分を作り出すこと。それがわたしという人間の根本的な状況であり、サルトルにとってはそれこそが、意識の目覚めた瞬間から死が意識を拭い去る瞬間までの、人間の状況なのだ。わたしは自分自身の自由の源であり、それ以上で

も以下でもない。

この考えかたは非常に魅力的だったため、第二次世界大戦の終盤までに完全な形として磨き上げられると、サルトルはたちまちスターになった。さまざまな場でもてはやされ、教祖としてあがめられ、インタビューを受け、写真を撮られ、記事や序文を依頼され、委員会に招待され、ラジオで喋らされた。専門以外の話題でもたびたびコメントを求められるようになったが、それでもサルトルはなにかしらを喋った。そして、シモーヌ・ド・ボーヴォワールも小説を書き、ラジオに出演し、日記を書き、評論や哲学論文に取り組んだ。そのすべてにサルトルの影響がみられたものの、作品の多くは独自に発展させたもので、主張すべきポイントもサルトルとは異なっていた。ふたりは一緒に講演や本の宣伝ツアーに出かけ、ときには会場の中心に置かれた玉座のような椅子に座らされ、実存主義の王様と女王様に仕立て上げられることもあった。[10]

自分がどれほど有名人になったかをサルトルがはじめて悟ったのは、一九四五年一〇月二八日、パリのサントロー・ホールの〈クラブ・マントナン〉で講演を行なったときだ。サルトル自身も主催者側も、聴衆の数を少なく見積もりすぎていた。チケット売り場は大混乱に陥り、窓口に近づくこともできないおおぜいの観客が、代金を払わずなかに入っていった。会場では小競り合いが起きて椅子が壊れ、季節はずれの暑さで何人かが気を失った。「タイム」誌の写真にはこんなキャプションが添えられた。「哲学者サルトルに女たちが気絶」[11]

講演会は大成功だった。サルトルは身長が一五七センチほどしかないので、聴衆からはほとんど見えなかったはずだが、それでもみずからの思想を情熱的に語りかけた。その講演はのちに『実存

主義とは何か』という本にもなった。講演で語られたある逸話は、ナチスによる占領と解放を経験したばかりの聴衆にとって、新鮮に聞こえたはずだ。その話はサルトル哲学の衝撃と魅力を同時にあらわすものだった。

サルトルが語ったのはこんな話だ。フランスが占領されていた時期のある日、元教え子が相談にやってきた。その青年の兄は一九四〇年、フランスが降伏する前に戦死し、父は占領軍に協力する側となり家族を捨てた。その結果、母親をそばで支えるのは青年ひとりになってしまった。しかし、彼が内心望んでいたのは、ひそかに国境を越えてスペイン経由でイギリスに渡り、自由フランス軍（フランス本土陥落後、ドイツへの抵抗を続けた軍事組織）に加わってナチスと戦うことだった。雄々しく戦って兄の無念を晴らし、父の鼻を明かして祖国解放の力になりたかった。問題は、食料を手に入れるのも困難なこの時期に、母をひとり残せば危険にさらしかねないことだ。もしかしたら、息子の行動のせいでドイツ軍からいやがらせを受けるかもしれない。はたして、母ひとりを確実に助ける道を選ぶべきか、あるいはおおぜいの市民を助けるために戦闘に参加するべきか。[12]

哲学者たちはこの種の倫理的難問に答えようと、今もって議論を繰り広げている。サルトルの挙げた話は、「トロッコ問題」[13]という有名な思考実験に似ている。制御不能になった列車あるいはトロッコが線路を猛スピードで走ってくるが、その先には五人の作業員がいる。もしなにもしなければ五人は死んでしまう。そのとき、線路の切り替えレバーがあるのに気づく。それを引けば列車を支線に誘導できる。けれども、そうすると支線で作業しているひとりが死ぬことになる。なにもしなければその人は死なない。レバーを引いてひとりを死なせるか、それともなにもせずに五人を死な

せるか（バリエーションのひとつに「太った人の問題」というのもある。この場合は、近くの橋の上にいる太った人を線路に突き落としさえすればトロッコを止められる。こちらのケースでは、実際に手を下さなければならないため、より感情を揺さぶる難しいジレンマが生じる）。サルトルの生徒が迫られた決断は、「トロッコ問題」の一種とみることもできるが、さらに複雑なのは、イギリスに行けばほんとうに人を助けられるのかも、ひとりになった母がどれほど困るのかも、はっきりとはわからないことだ。

しかし、サルトルはいかにも哲学者ふうに道理を説いたりはしなかったし、ましてや「トロッコ学」とまで呼ばれるようになった思考実験の方法も用いなかった。彼はこの問題をもっと個人的なこととして考えるよう聴衆に訴えかけたのだ。もしそういう選択を迫られたら、どんな気持ちになるだろう。困り果てた青年はどんな決断を下すだろう。はたして、青年の力になれるのはだれで、どうやってか。この最後の質問に、サルトルは青年の力になれないのはだれかという観点から迫っていった。

サルトルのところへ相談に来る前に、青年は道徳の専門家に助言を求めることを考えた。まずは司祭が思い浮かんだが、司祭はときとして占領軍の協力者であるうえ、キリスト教の倫理観は、隣人を愛して他者に善行を施せと教えるだけで、その他者が母親であってもフランスであっても同じだ。次に、学校で学んだ哲学者たちの言葉に頼ることを思いついた。なんといっても知恵の泉なのだから。けれども、哲学者の言葉は抽象的すぎて、個々の状況についてはなにも教えてくれない。それならば、と自分の内なる声を聞いてみることにした。おそらく、胸の奥深くに問いかければ答

えが見つかるはずだ。しかし、うまくいかなかった。心のなかからは、相反する言葉が聞こえてくるばかりなのだ（たぶんこんなふうに。「ここに残るべきだ、いや行くべきだ。勇気を出して行動すべきだ、いや善き息子であるべきだ。踏み出したい、でも怖い。死にたくない、逃げなければ。でも父より立派な人間になりたい！　おれはほんとうに祖国を愛しているのだろうか。愛するふりをしているだけなのでは？」）。こんな不協和音を聞いているうちに、自分自身さえ信じられなくなった。そして最後の手段として、以前教わったサルトルのもとを訪れたというわけだ。サルトルなら、少なくともありきたりの答えかたはしないだろうから。

予想どおり、サルトルは彼の話に耳を傾けたあと、あっさりこう答えた。「きみは自由だ。だから選択できる。自分で考えるんだ」。この世界にヒントなど見つからない、とサルトルは言った。どれほど権威のある人物でも、自由という重荷をきみの代わりに背負ってはくれない。道徳と現実問題を好きなだけ秤（はかり）にかけてよいが、最終的には腹をくくってなにかをしなければならないし、それがなんであろうと、決めるのはきみなのだ。

はたしてこの言葉が青年の役に立ったのか、そして結局のところ彼がどういう選択をしたのか、サルトルは語っていない。青年が実在の人物なのかどうかもわたしたちにはわからない。もしかしたら、サルトルの若き日の友人たちを混ぜ合わせた人物だったかもしれないし、まったくの創作かもしれない。ともあれ、サルトルが伝えたかったのは、このケースほどドラマティックな苦境を経験しなくても、だれもが青年と同じように自由だということである。もしかしたら、わたしたちは道徳規範に導かれて行動しているつもりかもしれないし、そのときどきの気分や過去の経験によっ

て、あるいは周囲の出来事に応じて行動しているつもりかもしれない。もちろん、そうした要因もなんらかの影響をおよぼしはするだろうが、それらすべてを足しても、結局のところは、行動を選択する際の〝状況〟にしかなりえない。その状況がどれほど耐えがたいものであれ――もしかしたら死刑執行の寸前かもしれないし、ゲシュタポに捕らえられているかもしれないし、崖から落ちるところかもしれない――どうするかを自分で決め、行動する自由がわたしにはある。今いるところをスタート地点として選択すればいい。そして、選択するということは、自分がどんな人間になるかを選ぶことでもある。

そうすることが困難に思えたとすれば、それは実際そのとおりだからだ。つねに決断し続けなければならない状態は不安であり、サルトルはそれを否定していない。しかも、実際に大事なのはなにをするかだ、と指摘してその不安をさらに助長してみせる。決断を下すときは人類全体を思い、人類の行ないすべてに責任を負うくらいの覚悟をしなければならない。こんな境遇に置かれた自分は犠牲者だとか、間違ったアドバイスを受けたからだとかごまかして責任逃れをすると、人間としての資質に欠ける偽りの実存を選ぶことになり、自分自身の〝本来性（ハイデッガーの用語で、サルトルもニュアンスを変えて引き継いだ。「人間のほんとうのありかた」といった意味で、ハイデッガーでは「自己の死を直視する決意性」を核とする）〟から切り離されてしまう。

考えようによってはなんとも恐ろしいが、同時にこれは大きな望みでもある。というのも、サルトルの実存主義は、努力さえすれば、自己の本来性に忠実でなおかつ自由でありうると言っているのだから。それは苦しいのとちょうど同じだけ、そして同じ理由で、わくわくすることでもあるのだ。サルトルは、講演会の少しあとのインタビューでみずからの主張をこう要約している。

人を救いに導いてくれるたしかな道など存在しません。つねに自分で道を創造しなければならないのです。とはいえ、創造するには自由と、言い逃れしない責任とが必要であり、それがあれば人は希望に満たされるはずです。[14]

一九四五年、戦争によって国の社会構造も政治組織も打撃を受けていた当時、この考えかたは国民の支えとなり、もてはやされた。フランスでもどこでも、人々は直近の過去を忘れ、戦時中に道徳を汚す行ないをしたことも、恐怖に陥ったことも忘れて、新たな道を歩き出したいという思いにあふれていた。しかし、心機一転を求めるのにはもっと深い理由もあった。聴衆がサルトルの言葉を聴いた当時は、ヨーロッパの多くが廃墟となり、ナチスの絶滅収容所の実態があきらかになり、広島と長崎が原爆で破壊された時期だったのだ。戦争を経験した人々は、人間が社会的規範から完全に逸脱しうることを知った。だからこそ、人間に固有の性質などというものに疑問を抱いたのだ。新しく立ち上がってくる世界がどんなものであれ、それは政治家や宗教家など、権威の手を借りることなく創造されるべきだ。たとえ哲学者の手を借りるにしても、抽象的な世界に隠遁する古いタイプの哲学者であってはならない。そんなとき、この使命にぴったりの、意欲的で新しいタイプの哲学者があらわれたのだ。

一九四〇年代なかば、サルトルは大きな疑問を抱いていた。もしわたしたちが自由だとしても、これほど困難の多い時代にその自由をどう使えばいいのか。広島への原爆投下後すぐに書きはじめ、

講演と同じ一九四五年一〇月に発表された「大戦の終末」という評論のなかでサルトルは、どんな世界を創造したいのかを決め、それを実現させなければならない、と読者に説いた。[15] これから先、わたしたちは人間を意のままに破滅させることができるし、そうなれば人類の歴史も地球上の生命もすべて消滅してしまう。それを阻止できるのは、わたしたちの自由な選択以外にはない。生き延びたければ、生きようと決意する必要があるのだ。だからこそサルトルは、同じ種である人間を恐怖に陥れた人類、そしてそこから学び取り責任を担おうとしている人類にふさわしい哲学を提案したのである。

訳者あとがき

こんなにも哲学の熱い時代があったのかと、わたしは本書を訳しながらめまいのような感覚に襲われた。ひとつの思想が哲学者たちを次々とつないでいき、そこにまた新たな思想が生まれ、輪が広がっていく。その間にも世界の状況はめまぐるしく変わる。本書に登場する哲学者たちが活躍したのは、おもに第二次世界大戦前後の、まさしく激動の時代である。彼らは社会の変化に巻き込まれ、ときにみずからの信念を揺さぶられて考えを変えることもあった。だからこそ、哲学者自身の人生と背後の歴史を知らなければ、思想のほんとうの姿は見えてこないのだ。「哲学は人生のなかに置かれてこそおもしろくなり、同様に、ひとりひとりの人生経験は、哲学的に見ることでさらにおもしろいものになる」と著者は言う。

本書で取り上げられる二大巨匠は、ジャン＝ポール・サルトルとマルティン・ハイデッガーである。そして、エトムント・フッサールとシモーヌ・ド・ボーヴォワールとモーリス・メルロ＝ポンティについても多く語られている。だれかひとりを切り離して語ることはできない。すべてがつながっているからだ。そんなふうにつながっていくようすを、著者はこう表現する。「哲学者たちが、二〇世紀の最初から最後まで、それぞれの言語で多彩な話題を語り合っていたようにわたしには思える。彼らの多くは互いに会ったこともない。それなのに、客で混み合う大きなカフェで、彼らが

一堂に会している場面をわたしは想像してしまう」。それが本書のタイトルになった。

著者自身、若くしてサルトルに魅了され、大学ではハイデッガーに心酔する。その後、哲学からはほぼ離れていたものの、あるとき偶然メルロ＝ポンティの著作を開いてみると、意外なほど引き込まれ、メルロ＝ポンティの友人だったボーヴォワールへ、サルトルへ、アルベール・カミュへと次々に興味が広がり、以前学んだ実存主義や現象学が生き生きと蘇ってきた。同時に、学生時代、哲学に夢中だった自分自身にも再会することになる。そうして、「実存主義と現象学の話を、哲学と伝記を組み合わせる形で書きたいと思うようになった」というのだ。このように、著者自身の哲学への想いが横糸としてしっかり組み込まれているからこそ、本書は血の通った本になっているように思う。

ウィーンで哲学者フランツ・ブレンターノの思想を学んだフッサールが、目の前の現象をありのままに記述する現象学を提唱する。フッサールの弟子として頭角を現したのがハイデッガーだ。やがてハイデッガーはフッサールを乗り越えるようにして、師よりも人気を得るが、ナチスに肩入れするようにもなっていく。

いっぽうパリでは、サルトルとレイモン・アロンがカフェでアプリコットカクテルを飲みながら語り合っていた。ベルリンでフッサールの思想を勉強中だったアロンは、その斬新さをサルトルに伝えて驚かせる。「もしきみが現象学者だったら、このカクテルを語ってそれを哲学にすることができるんだ！」。現象学を学んだサルトルはそれを独自にアレンジし、実存主義という形にしてみせ

る。「実存は本質に先立つ」。つまり、人間はさまざまに張られたラベルよりも、自分自身という実存が先にあり、自分の責任においてどうにでもなれる自由な存在だということである。サルトルの周囲にはカミュやメルロ＝ポンティやボリス・ヴィアンやジャン・ジュネがいて、彼らはカフェで熱心に議論を交わす。しかし、友情とイデオロギーは切り離すことができず、いったん意見が分かれると激しくぶつかり合う。仲のいいときも悪いときも、とにかく熱量が高いのである。そのようすを、著者はこんなふうに書いている。「フランスでは、ガブリエル・マルセルがジャン＝ポール・サルトルを攻撃し、サルトルはアルベール・カミュと仲たがいし、カミュはメルロ＝ポンティと仲たがいし、メルロ＝ポンティはサルトルと仲たがいした。そしてハンガリー出身の知識人アーサー・ケストラーは全員と仲たがいし、路上でカミュを殴った」。革命をめざすサルトルと、反抗で事態を改善しようとするカミュとの確執がどんなものだったか、本書には実に興味深く描かれている。

サルトルといえば実存主義や小説『嘔吐』で有名だが、本書にはサルトルの多面性が取り上げられている。たとえ喧嘩別れした相手でも、亡くなったときには心のこもった追悼文を書く情の厚さがあるかと思えば、薬物を使って幻覚症状を体験したり、女性を次々にくどき落としたり。自分の容姿に悩んだ時期もあったようだが、そんなものに捕らわれて生きるのはやめよう、と決意するところはいかにもサルトルらしい。

サルトルとボーヴォワールの関係は当時としては型破りで、いったいどれだけの非難を浴びたか容易に想像できる。ふたりとも自由恋愛を楽しみ、しかもその経緯を報告し合っていたという。なにより印象的だったのは、ふたりが仕事の面でもいちばんの理解者であったことだ。互いの作品を

だれよりも早く読み、批評し、励まし合う。ボーヴォワールが怠けていると、サルトルはこんなふうに叱ったという。「ねえカストール、なぜ考えるのをやめてしまったの？　なぜ仕事をしない？　きみは書きたいんじゃなかったのか？　専業主婦にはなりたくないんだろう？」

ボーヴォワールの『第二の性』についても、本書ではその革新性が的確にまとめられている。わたしは翻訳しながら何度となく図書館を訪れ、本書に引用されている出典を調べたが、書庫から運ばれてきたボーヴォワールの著書は、まるでタイムカプセルから取り出されたように古色蒼然としていた。ところが、『第二の性』や自伝を読んでみると意外なほどおもしろく、現在でもまったく古びていないことに気づいた。『第二の性』では、女性が置かれた状況を構造的、歴史的に腑分けしていく手腕が見事で目を啓かされるし、自伝四部作（『娘時代』『女ざかり』『或る戦後』『決算のとき』）や、みずからの老いを直視した『老い』では、その生々しいまでの率直な語り口にどきどきしてしまったほどだ。

サルトルもボーヴォワールも最後まで無神論者を貫いた。実存主義を提唱するくらいだから、それは当然だろう。ボーヴォワールはサルトルの死に打ちのめされたが、理性を失うことはなかった。この場面は、サルトルへの深い愛情が感じられて心に染みる。「彼の死によってわたしたちは切り離される。わたしが死んでもふたりが再会することはない。それがものの道理だ。こんなにも長くふたりが協力して生きてこられたこと自体をすばらしいと思う」

本書を訳しながら、わたしがとくに魅力を感じた人物が三人いた。カミュとシモーヌ・ヴェイユ

とヤン・パトチカだ。とくにヤン・パトチカについては、その思想と生涯について今回はじめて知り、強い感銘を受けた。三人に共通するものがあるとすれば、「抵抗」だろうか。みずからが前へ出ていくというよりは、身を低くして抵抗することで、信念を貫いていたように思える。彼らは本書において二大巨匠ほど大きく取り上げられてはいないが、ぜひその人生の一端を多くの人に知ってもらいたいと願っている。

また、訳しながらわくわくしたエピソードもある。フッサールの原稿を戦火から守るべく、弟子や修道女たちが安全な場所へと力を合わせて運ぶのだ。膨大な原稿をスーツケースに入れて夜汽車に乗り、ベルギー大使館に運ぶ場面は、まるで映画を観ているようでハラハラさせられた。こうした命がけの努力があったからこそ、哲学者たちの思想は後世に受け継がれたのである。

「大きなもの」に従って戦争に巻き込まれ苦しんだ人々が、第二次世界大戦後、実存主義に救いを求めたことはよく理解できる。人間は自由である。ゆえに自分の行動に責任を持たなければならない。それはめまいがするほど苦しい自由でもある。それでも、大きなものに唯々諾々と従うよりははるかにいい。現在、ふたたび大きなものにだれもが従いたがる時代になりつつあるように見える。だからこそ今、実存主義が新鮮に感じられるのかもしれない。

翻訳にあたっては酒井清一さんの校閲を受け、専門用語をはじめ細かな点までご教示いただいた。心から御礼申し上げる。そして、本書を翻訳する機会を与えてくださった紀伊國屋書店の有馬由起

子さんに深い感謝を捧げる。いつもながらていねいな編集作業には頭が下がりっぱなしである。

現象学とはなにか、サルトルの実存主義はどこが魅力的だったのか、ハイデッガーの『存在と時間』はどんな本だったのか、メルロ＝ポンティは知覚をどう捉えていたのか、ハイデッガーとヤスパースはどんな関係だったのか、戦後、実存主義に代わってあらわれたのはどんな思想なのか。そのすべてが本書に描かれている。哲学が熱かった時代の名残を知る世代にとっても、そしてサルトルを歴史上の人物としてしか知らない世代にとっても、二〇世紀のヨーロッパ哲学を概観するにはもってこいの作品である。ようこそ実存主義者のカフェへ。

二〇二四年二月

向井　和美